

|         |  |
|---------|--|
| 氏 名     | 川端 隆寛  |
| 授与した学位  | 博士   |
| 専攻分野の名称 | 医学   |
| 学位授与番号  | 博 甲第 6103 号  |
| 学位授与の日付 | 令和 2 年 3 月 25 日  |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻<br>(学位規則第 4 条第 1 項該当)   |
| 学位論文題目  | Post-ablation Syndrome after Percutaneous Cryoablation of Small Renal Tumors: A Prospective Study of Incidence, Severity, Duration, and Effect on Lifestyle<br>(小径腎腫瘍に対する経皮的腎凍結療法後の焼灼後症候群の発生頻度や重症度、期間、生活への影響に関する前向き研究) |
| 論文審査委員  | 教授 藤原俊義 教授 渡部昌実 准教授 渡邊豊彦   |

#### 学位論文内容の要旨

経皮的腎凍結療法後の焼灼後症候群の発生頻度や重症度、期間、生活への影響を前方視的に検討した。

対象は 2015 年 12 月から 2017 年 12 月の間に CT ガイド下腎凍結療法を施行され、病理学的に腎癌（平均 20mm）と診断された 39 人（男性 27 人、女性 12 人、平均 62 歳）、40 セッションであった。焼灼後症候群に相当する発熱や恶心、嘔吐、倦怠感と術後 21 日目までのこれらの症状の生活への影響（全般的活動と家事を含む仕事）が質問紙を用いて評価された。症状は common toxicity criteria of adverse events に従って分類した。

発熱、恶心、嘔吐、倦怠感の発生頻度はそれぞれ 100% (40/40)、20% (8/40)、20% (8/40)、63% (25/40) であった。ほとんどの症状 (96% 78/81) が術後 2 日目までに生じた。各セッション毎の最高グレードは、発熱で 0 (37°C 以上 38°C 未満と定義) (n=24)、1 (n=15)、2 (n=1)、恶心で 2 (n=8)、嘔吐で 1 (n=7)、3 (n=1)、倦怠感で 1 (n=14)、2 (n=11) であった。ほとんどの症状 (94% 76/81) が術後 8 日目までに改善した。全般的活動と仕事への障害を表す値 (0—10) の最大値の平均は、それぞれ 3.6 と 1.1 であった。

全ての症状は概して早期に発症し術後 8 日目までに改善し、自己限定期で生活への影響は軽微であった。腎凍結療法を施行された患者を管理する医師は、焼灼後症候群の臨床経過とその影響について認識しておく必要がある。

#### 論文審査結果の要旨

本研究は、経皮的腎凍結療法後に生じる発熱や恶心、嘔吐、倦怠感などの症状の発生頻度や重症度、期間、生活への影響などを前方視的に調べた観察研究である。

病理学的に腎癌と診断され、CT ガイド下腎凍結療法を施行された 39 人を対象に、アブレーション後に主にみられる上記症状を質問紙を用いて集計した結果、発生頻度は発熱 100%、恶心 20%、嘔吐 20%、倦怠感 63% であり、ほとんどの症状が術後 8 日目までに改善したことが明らかとなった。したがって、腎凍結療法後にみられる症状は早期に発症するものの、術後 8 日目までに改善し、生活への影響は軽微であると考えられた。

委員からは、凍結療法後の再発に関する質問があったが、本研究の解析内容には含まれていなかった。また、ラジオ波焼灼術や腎部分切除との比較検討が望まれるとのコメントもあった。

本研究は、腎癌凍結療法後に発生する症状を前方視的に観察し詳細に検討した点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。